

おろか婿

● 深沢

昔むかし、大里深沢の村はずれの一軒家に、とても素晴らしい器量よしの婿がいた。したがって、嫁（女房）もまたすごい美人であった。ところがこの婿様、顔やすがたに似ず頭の中味が低く、誰からも「おろか婿」の名で呼ばれていた。

ある時、女房の実家の縁日によれば、色々な品々御馳走を出されたが、その中でも「だんご」が一番で、ベロもヘソもぬけるほどよかった。

この婿様、この味が忘れられず、女房に作らせ、また食ってやろうと「だんご、だんご……」と口の中でくり返ししながら、家路の帰りを急いだ。

一軒家のために道は悪く、あいにく雨が降りであったので、路面に深い水たまりが出来ていた。婿様は、いつもの調子で「どっこいしょ」と飛びこした。そのはずみに「だんご」が「どっこいしょ」と変わってしまい、家に着くや「どっこいしょ」を作れと女房に言いつけた。言われた女房は何がなんだかさっぱりわけが分からず、一つ言い二つ言い、つい二人は大口論となった。

たまたま外出先から帰宅した母親が、このさわぎの事情を知るや「おろかもの」と叱り、次の瞬間かたわらにあった太々とした「すりこぎ棒」で、婿様の脳天め

民話 4

がけてボーンと強く一撃を食わした。

婿様は痛い痛い両手で頭をおさえ大苦しみ。しばらくたって、女房が婿様の頭を見て「アラッ、だんごのようなコブが大きく出来たワ」と言ったその途端、この婿様半泣きの大声で「そのだんごのことだ」と叫んだという。

この「おろか婿」の名前、また、住家などのことは何時どうなってしまったのか、今は誰にも分からない。

（稿者 添田光郎）

『天栄村の民話と伝説』から

